060827

令和６年度２学期始業式式辞（西条）

皆さん、おはようございます。いよいよ今日から第２学期のスタートです。１か月余りの夏休みは「時間の無駄遣い」をせず、有意義に過ごせたでしょうか。

野球部、ソフトボール部、弓道部、そして芸術文化発表会をはじめとする夏休み中の皆さんの活躍には目覚ましいものがありました。充実した夏休みを過ごしている皆さんの姿を見て、私は本当にうれしく思っています。

これから始まる２学期も、部活動はもちろん、学習、運動会や文化祭などの行事を通して、皆さんには自分を磨き続けていってほしいと思います。では、２学期を実りあるものにするために、皆さんはどうすればいいのでしょうか。

この夏開催されたパリ・オリンピックでは、多くのアスリートが感動を届けてくれましたが、ボルダーとリード複合の競技で銀メダルを獲得した千葉県の公立高校３年生、安楽宙斗選手のことを、皆さんはたぶん知っているだろうと思います。７歳からクライミングを始め、高校２年の時にワールドカップ参戦１年目にして、年間総合優勝。その後、パリ・オリンピックのアジア予選でも優勝し、日本代表となりました。このように、一見順風満帆に見える彼の競技人生ですが、実は高校１年の時に初出場した世界選手権大会では、力を出し切れず失敗しているのです。「この大会で３位以内に入れば、パリ五輪への切符が確定だ。」決勝前に、それを意識してしまった安楽選手は、決勝では緊張で体がこわばり、スタミナを消耗して４位に終わりました。彼はその時、五輪への切符を逃したこと以上に、自分が力を出し切れなかったことが悔しくて、その場でこらえきれず涙をこぼしたといいます。

私はこの話を聞いた時、自分は悔しくて涙が出たこと、つまり失敗して涙がでるほど物事に懸命に取り組んだことがあっただろうかと自分自身を振り返りました。皆さんはどうでしょうか。私も含めて、頑張ってもいい結果が出ないとやめてしまいたいと考える人がほとんどだと思います。でも、その悔しさをバネに次のチャレンジができる人にならなければいけないと、私は安楽選手から学びました。そして、そもそも「泣くほど悔しい思いができる何か」を見つけられること自体が、本当に貴重で幸せな体験なのではないかということに気づきました。

では、「泣くほど悔しい思いができる何か」とは、皆さんにとっていったい何なのでしょう。一般的に、人は自分の可能性に気付いていないものです。部活動においても学習面においても、皆さんは皆さん自身がまだ気づいていない無限の可能性を秘めているはずなのです。そして、その可能性を開花させるには、「幅広く学ぶ」ことが大切です。近い将来でさえ予測できない激動の現代においては、偏りなく幅広く学ぶことこそが肝要なのです。数学が嫌いだから文系にする、国語が苦手だから理系だなどという考えは、もう時代遅れといっても過言ではありませんし、何よりも残念な選択だと私は考えています。

勉強に、行事に、部活動に全力で取り組み、「幅広く学ぶ」ことで、ハイレベルな文武両道を目指す西条の良き伝統を、皆さんの力で、次の世代へと繋いでくれる２学期となることを願って、式辞とします。